

学会ニュース

目次

・第26回大会について	1
・南大路 振一 学会ニュース 第43号を読んで	2
・安室 可奈子 18世紀美術に関する電子ツールについて：美術史とインターネット	4
・事務局より	17

第26回大会について

来年度の大会は、2004年6月12日（土）、13日（日）に、南山大学（名古屋）で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、中矢俊博会員です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。

共通論題：「奢侈論」（仮題）（原則として6月13日を当てる予定です）

「奢侈」の問題は、18世紀ヨーロッパにおいて、経済、身分秩序、道徳（正確には道徳の低下とそれがもたらす国家の衰退）、さらには芸術ないし美学といったさまざまな分野において根幹をなすものでした。奢侈をめぐる論争は当時のヨーロッパ社会が直面していた変化を映し出す役割を果たしたといえるでしょう。こうした分野横断的な主題を、同時代の日本の状況をも視野に収めつつ、3名ないし4名のパネリストの方に論じていただきます。

コーディネーターおよび司会は、森村敏己会員（一橋大学）をお願いいたしました。

自由論題公募（原則として6月12日を当てる予定です）

第26回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファイル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方）を付けて、3月19日（金）までに学会事務局までお申し込み下さい（大会が例年よりも1週間早まりましたため、発表希望申し込み期限も例年より早く設定しておりますので、ご注意ください）。発表者の持ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、持ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいますようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

学会ニュース 第43号を読んで

南大路振一

「学会ニュース」の43号が届いた。まず2期4年にわたり重責を果たされた代表幹事の離任のご挨拶と、国際18世紀学会の動向についての詳細なご報告。一般会員 私もその一人であるが の多くが知らないところで、日頃、学会の運営にあたられた方々のご苦労には心から謝意を表したい。

これに続いて掲載された、会員の村田さん(と呼ばせていただく)の随想には、私は深い感銘をおぼえた。これまで同氏とお話できたのは、数年前、懇親会の折だった。席が混雑していたので短い立ち話に終わったが、ずいぶん個性のはっきりした方という印象が残った。それ以後、どちらも年1回の総会にかならず出席というわけではないので、正直のところ、まったく交渉がないまま今日に至っている。しかし今回のご寄稿から、同氏がこの学会に求められたものが、それとして分かるような気がする。私もまた本会の創立当時のことを思い起こす一人である。そして村田さんの文面からすると、お互い年齢も近いように思われる。二人ともこの学会ではいつの間にか古い世代に属することになった。それだけに、「ニュース」の最終ページの退会者リストのなかに村田さんのお名前を見て、ひと時、考え込まずにはおれなかった。

村田さんは、「発足当時のこの学会には、例えば18世紀当時のフランスにあったらしい知的サロンの雰囲気が見られたが、それは次第に地を払いつつあるような気がする」と述べられ、以前の講演のなかには「好きなことを喋りながら、専門外でも好奇心のある人びとには興味をひくものがあった」ことを覚えておられる。私の場合はどうだろう。

私は18世紀のドイツ文学を レッシング(1729-81)を中心に据えて 専攻している。それはヨーロッパの後進国ドイツに「近代文学」が成立した過程を跡づけることを意味する。ところで当時のドイツのすぐれた作家や批評家は、例外なく、熱心にフランスやイギリスの文化を摂取し、自分たちの教養(Bildung)のよき糧とした。したがって、彼らを十分に理解しようとするれば、私たちもまた彼らと共に、そして彼らを通じて当時のフランスやイギリスのことを学ばなければならない。これは18世紀のドイツ文学研究にたずさわる者のいわば宿命である。このことを意識して、私は喜んでこの学会の会員になった。そして今日までさまざまな有益な経験をすることができた。

日本18世紀学会が持つ むしろ、持つべきサロンのな性格とその意義については、創立20周年を記念する1999年のシンポジウム(共通論題「日本の18世紀研究 過去と未来」)を司会された多賀さんが明快に語っておられる(年報 第15号、2000)。この学会では「自分の領域の外へ出ることを、自分の知らない言語に耳を傾けることを誰も厭わない」。それによって、この学会は「様々な学会を越えて存在する共和国」を形づくることになる、と。このシンポジウムの報告者の一人であった私もまた、自分の実感として、次のような趣旨のことを述べた。「学会である以上、そこでの発表は何らかの<新しい知見>を提供しなければならない。ただ、このような学際的な学会では<新しい知見>と言われるものの意味が、普通の専門的な学会の場合とはやや異なるように思われる。平たく言えば、私たちのこの学会では、お互いが門外漢つまり素人の立場にあって、いわゆる<耳学問>をすることが珍しくない。しかしこの<耳学問>は 自分なりに 一層たしかな知見にすることができるだろう。」そしてまた、このような学際的な学会での発表は、予想外のところで反応をよび起こす可能性が大きい。それで発表者は「この可能性を信じて、よい意味で、大らかに振舞っていただきたい。もしこのようなスタイルが定着すれば、日本18世紀学会は、この方面からもますます貴重な知的<サロン>になることだろう…」 レッシングが好んだ表現を借りるなら、発表者は聴衆のあいだに、いわば「認識の酵母」(fermenta cognitionis)

を撒くのである。いささか私事にわたるため、ためらいもあるが、ほんの二、三例を挙げてみたい。

北イタリアの古都モデナで活動した人文主義者 L.A.ムラトーリ (1672 - 1750) は、18 世紀ドイツの知識人たちにはよく知られていた。とくに歴史家としての彼の名前はレッシングの著作にも散見する。ところで 17 世紀から 18 世紀にかけて先進国フランスの批評家たちが蔑視したのは、ドイツの言語と文学だけではなく、イタリアのそれも手厳しく評価された。そしてこの国でも、これに対する激しい 多分に愛国的な 抗議運動が起こった。それを代表したのがムラトーリであり、彼の大部な詩論『イタリアの完全な詩文』(全 2 巻、1706) 執筆の動機はそこにあったと言われる。イタリア語の素養のまったくない私は、参考文献に頼るしかないが、この詩論の内容 とくに、文芸作品の創作原理としての〈想像力〉を説いた章などに興味をそそられる。詳しいドイツ文学史では、40 年代にチューリヒを中心に活動した文芸批評家たち いわゆる「スイス派」(ボードマーとプラインガー)

による一連の著作とこの詩論との内的関連に言及される。しかしムラトーリの名前が日本独文学会で聞かれることはまずないだろう。それが現実である。それだけに、日本 18 世紀学会の第 20 回大会 (1998) で、共通論題「文芸共和国」の下に堀田さんがムラトーリについて報告されたときは、心強い思いがし、あらためてこの学会の有難味を感じた。

レッシングは、1770 年、北ドイツの閑静な町ヴォルフエンビュッテルにあるアウグスト公図書館の司書に迎えられた頃、A.ファーガスン (1723 - 1816) を読みなおす衝動に駆られていた。そのことはベルリン在住の弟カールと友人メンデルスゾーンに宛てた手紙が語っており、それらは彼の晩年の神学思想を論じる際には、かならずといってよいほど引用される。しかし厄介なことに、彼がその折ファーガスンのとくにどの著作を念頭に置いたかが、そこには明言されておらず、研究者たちの見解も今日まで一致していない。この問題を解決するには、レッシングのそれ以後の著作をたえず考慮しながら、まずファーガスンの二つの主著『市民社会史論』(1767) と『道徳哲学綱要』(1769) を熟読しなければならないが、それにはこの方面の研究者の援助をぜひとも仰がねばならない。私のこのような夢がいつか日本 18 世紀学会で叶えられることを願う次第である。

過日、会員の高橋 (博巳) さんから、朝鮮通信使と日本の儒者たちとの知的交流を点描された英文の抜刷をいただいた。今年の 8 月、ロサンゼルスでの国際 18 世紀学会の第 11 回大会で報告されたものである。登場する人物は 一、二を除いて 私が初めて知る者ばかりだった。しかしその一人、滝 鶴台 (1709 - 73) についての短い記述はとくに興味深かった。彼は、民族 (国民) にはそれぞれ固有の生き方があり、その多様性を基にして万国の平和が達成されることを力説したという。私は思わずヘルダー (1744 - 1803) を連想した。このような思想は 18 世紀の日本では鶴台だけのものだったのか、それとも他の儒者たちにも見られたのか、そもそもヘルダーへの連想には意味があるのか 。江戸時代の儒学にはまったく不案内の私は好奇心を募らせ、私たちの学会の席で鶴台の思想をもっと詳しく紹介していただくよう高橋さんをお願いした。

村田さんは、「(昨今) 歴史や思想は無用の長物と断じる風潮がはびこって」といると慨嘆される。たしかに歴史や思想、それに文学を扱う人文科学は、本来の学問としては、少なからぬ無理解にさらされている。ここでも啓蒙が必要だろう。今の私にとくに妙案があるわけではない。しかし日本 18 世紀学会の地道な活動は、結果として、人文科学の復権にも寄与するのではないだろうか。このことを信じたい。

(2003 年 11 月末、記す)

18世紀美術に関する電子ツールについて - 美術史とインターネット -

安室 可奈子

はじめに

学会ニュース第43号で、馬場朗氏が、「18世紀フランス関係電子資料・情報の入門体験報告」についての記事を発表された。その中では、研究を進めていく上で有用な電子書籍、ウェブ上のサイトについて紹介され、筆者も大変参考にさせていただいた。そこで、この馬場氏の記事を踏まえた上で、今回は、美術史研究の過程で筆者が実際に活用している電子ツールについて、簡略に報告したい。

さて、美術史と密接に関わる学問に、アート・ドキュメンテーション研究がある。これは、実に様々な媒体によって蓄積され、複雑化されがちな美術情報を、的確に分類・整理・保存するための情報科学の一分野で、むろん電子媒体資料も大きな研究テーマとされている。日本でも、司書と美学・美術史研究者の協力の下、アート・ドキュメンテーション研究会が発足し、現在の美術研究の発展に大きく貢献し続けている¹。

筆者は18世紀のフランス美術を専門にしているが、所属していた日本大学大学院・木村三郎先生のゼミでは、研究の過程で、このアート・ドキュメンテーションの方法論を取り入れるよう、常に指導されていた。とりわけ、日々刻々と進化する電子ツールについては、週に一度のゼミの時間に、海外の美術館・図書館を中心とした画像・所蔵文献データベースや、電子書籍などの最新の情報が今でも次々と提供されている。本エッセーは、このような、筆者の研究体験の中で得た貴重な情報が土台となっている。

ところで、これから紹介する電子ツールは、厳密に言えば、18世紀のフランス美術に限定されるものではない。アート・ドキュメンテーションを重要な方法論の一つとして意識している、あらゆる国・時代の美学・美術史研究が生み出した成果の中から、インターネットやマルチメディアに関わる情報を抽出しているからである²。むしろ、幅広さと奥深さを兼ね備えたこれらの電子データベースが、実に様々な研究課題に応用できることを多少なりともお

¹ アート・ドキュメンテーションについては以下の文献に詳しい。波多野宏之『画像ドキュメンテーションの世界』、東京、頸草書房、1993

² 刊行物として、美術史の電子ツールに関して触れた先行研究には以下のものがあげられる。千速敏男「インターネットで美術情報を探す」、木村三郎『美術史と美術理論-西洋十七世紀絵画の見方-(改訂版)』、東京、放送大学教育振興会、(1992)1996, pp.235-236; 千速敏男『美術情報の探し方-西洋美術史を中心に-』滋賀、成安造形大学、1999, pp.36-64.

伝えできると幸いである。

・有用な電子ツールへの入り口

周知の通り、インターネット上で公開されているページは、美術に関するものだけでも、多種多様で膨大な数が存在している。これらの、あらゆる美術関係サイトの概要をつかみ、美術研究に有用なものを探し出すためには、「入り口」となるリンク集の存在が非常に重要となってくる。ここでは、筆者が日々の研究において活用する中で、特に重要と思われる6つのリンク集について紹介したい。

a. フランス国立図書館「しおり」<http://www.bnf.fr/pages/liens/index.htm>

Bnfが、800以上のカテゴリーにおいて、有用なサイトを選別し、掲載している。芸術に関連する大項目には「芸術・美術」「建築」「デザイン」「版画（2003年12月現在準備中）」等がある。それらの中から、「芸術・美術Art」の項目を見てみよう。この大項目の中には、「芸術一般」「芸術の現状」「美術館」「現代美術」「デザイン」「美術市場（2003年12月現在、準備中）」の中項目が設けられており、さらにその下に、フランス国内外の文献所蔵データベース、画像データベース、美術機関等、ページが多数紹介されている。そのどれもが、しっかりした選択眼に基づいたものなので、訪ねてみると、ほぼ外れがない。なお、有料のページはここでは取り上げられていない。

b. 大英図書館「研究調査資料集」<http://www.bl.uk/collections/wider/artwebsite.html>

イギリスでは、大英図書館が「研究調査資料集」として、各分野の参考資料やウェブ債とを紹介しており、その中を「芸術と人文科学」「アート・ガイド」「アート・インターネット資料」という経路で辿り着く「アート・ウェブサイト」のページで、英語圏を中心とした美術史関係のページ、画像データベース等の多数のサイトにリンクを張っている。

c. 加藤哲弘「美学の部屋：美学・美術史関係のリンク集」

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/katotk/sallinknf.html>

海外の図書館が設けているこれらのリンク集の、日本版とでも言えるのが、加藤哲弘氏のサイト「美学の部屋」内に設けられた、「美学・美術史関係のリンク集」である。この中には、国内、海外の美術館、美術関係の大学、研究機関、図書館、画像データベース、各機関

の文献サーチエンジンなど、あらゆるサイトの情報がつまっている。また、その分類・整理の方法も明解で、非常に使いやすい。日本で西洋美術研究を行うためのあらゆる電子情報の道標として常に活用できる。

d. ミシガン大学美術・デザイン学科「美術と美術史に関するあらゆるページのリンク集」

<http://www.art-design.umich.edu/mother/resource.html>

アメリカ国内を中心とした美術と美術史に関するあらゆる情報が記載されている。特に、「オンライン・アートにおける画像コレクション」のページは圧巻で、他のリンク集が拾っていないような有用なページも収録している。

e. ウィットコンブ「美術史に関するウェブ資料」

<http://witcombe.sbc.edu/ARTHLinks.html>

アメリカのスイート・ブライアー・カレッジのウィットコンブ教授が作成したページ。項目が多岐に渡っており、情報量が計り知れなく多い。画像データベースへのリンク集も充実。

f. 木村三郎ゼミ「西洋近代美術史と図像学の部屋」

木村三郎氏が、大学院で美術史を学ぶ学生を対象に設けた最新版のリンク集。cの加藤氏のリンク集で取り上げられていない、大学教育機関のサイトも含まれている。数多くのサイトが非常に論理的に分類・整理されているので、初学者には、インターネット時代の美術史への基礎固めとして有効であり、専門家にとっては膨大な情報の中から苦勞せずに有用な電子ツールへとアプローチできる点で優れている。一方で、近年、筆者も含め、学会発表者の続いている、木村ゼミの様子と指導方針が記述されている。日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻のホームページとリンク予定 (<http://www.art.nihon-u.ac.jp/m-fadm/>)。

以上、有用な電子ツールへの近道となると思われる6つのリンク集を紹介した。次に、個別のサイトについて、紹介していくことにする。便宜的に、これらのサイトのカテゴリーを「 .画像データベース情報」「 .文献情報」「 .美術関連情報」と分類した。

.画像・美術作品データベース

画像データベースを設けているのは、大きく、a.美術館や大学の美術研究機関等の公的機関か、b.画廊、出版社など商業機関の二つに分類される。両者の違いを述べるとするならば、

学術的な視点の有無が指摘できるだろう。例えば、レオナルドの有名な絵画《モナ・リザ》を例に挙げると、a.では作家・作品についての基本情報のみならず、それらの参考文献や、同一主題の作品を探すためのリンクが張られていることがある。一方、b.では、複製品の販売を目的としていることが多いため、作家・作品についての簡単な情報に止まっている場合が多い。

また、美術史では、図像学の方法論を用いる場合、同一主題の作例を多数閲覧して、概観する必要がある。ひと昔前までは、それらは、実際に海外の美術館に出かけていくか、日本で閲覧できる画集等の書物からしか入手できなかった。しかし現在では、このような画像データベースのおかげで、世界中のどこにいても、このような画像資料が迅速に収集できるようになった。

a.美術館・美術研究所等、公的機関の画像データベース

<フランス>

フランス文化省「ジョコンド」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/joconde/pres.htm>

フランス国内に所蔵されている美術作品約13万8000点(うち2万4000点の画像有)のデータベース。

フランス文化省「アルカード」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/arcade/pres.htm>

1800年から1936年までのフランス国家によって注文され買い上げられた作品にまつわる情報。

フランス文化省「アルシム」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/archim/accueil.html>

国立公文書館に所蔵されている公文書中の画像データベース

d.NARCISSEデータ・ベース 美術館の保存科学部門が作成した保存科学に関するデータ、20000点。

フランス文化省「メリメ」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/merimee/accueil.htm>

フランス国内の建築物に関する約16万点の情報。

フランス文化省「パリッシー」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/palissy/accueil.htm>

フランス国内の 家具・工芸品に関する25万点の情報（うち、画像は1万点）。

フランス文化省「ナルシス」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/lrmf/pres.htm>

フランス国内の1万2千点の美術作品修復記録データベース。修復過程での写真資料10万点あり。

フランス文化省「MNR」<http://www.culture.gouv.fr/documentation/mnr/pres.htm>

ナチス・ドイツによって強制収容された美術品の画像データベース

フランス国立図書館「オパリーヌ」<http://opaline.bnf.fr/>

フランス国立図書館の画室所蔵の版画、写真資料や、演劇、音楽関係の画像資料データベース。文字情報のみ。

フランス国立図書館「マンドラゴール」

<http://mandragore.bnf.fr/accueil.html>

フランス国立図書館所蔵写本資料の画像データベース。8万点。

フランス国立美術館連合「写真事務所」<http://www.photo.rmn.fr/fr/>

フランス国立美術館の刊行する図書・カタログ等のために複製写真を撮影する専門機関。作家名、主題名から検索できる。複製写真等の注文も可。約12万点。

リヨン市立図書館「所蔵版画データベース」

<http://sgedh.si.bm-lyon.fr/dipweb2/esta/estampes.htm>

版画家、下絵画家、主題等で検索できる。画像が非常に鮮明で、多数の版画作品がヒットする。

<イギリス>

大英博物館「イメージ・オンライン」

<http://ibs001.co.lo.firstnet.net.uk/britishlibrary/index.jsp>

大英博物館所蔵資料の画像データベース.

ロンドン市「コラージュ」<http://collage.cityoflondon.gov.uk/search.htm>

ギルドホール図書館版画室と美術館所蔵作品の画像データベース. 2万点.

<アメリカ>

サンフランシスコ近代美術館「ティンカー」<http://www.thinker.org/>

美術館が所蔵する11万点の作品のうち、8万2千点が画像データベースで画家別、主題別などで検索できる。絵画、彫刻、版画、素描はもちろん、新聞記事に掲載された挿絵等まで網羅しているのが特徴。

ゲッティ美術館「エクスプロアー・アート コレクション」

<http://www.getty.edu/art/collections/>

ゲッティ美術館の所蔵作品が、画家別、主題別に検索できる。画像資料の質が良い。画家の基本情報も充実。

アメリカ国会図書館「版画・写真オンライン・カタログ」

<http://lcweb.loc.gov/rr/print/catalog.html>

アメリカ国会図書館所蔵資料の画像データベース. 約500万点.

<その他>

オーストラリア国立大学「アートサーブ」<http://rubens.anu.edu.au/>

時代別、国別、作品のジャンル別など、様々なトピックから検索できる画像データベース。

東京大学「象形文化研究拠点：画像アーカイヴ」<http://www.picture.l.u-tokyo.ac.jp/arc/>

東大の青柳正規氏が中心となり、18世紀に刊行された古代美術の版画集を、スキャンして公開。ポンペイの遺跡、ピラネージ、『エルコラーノの出土の古代美術』など、18世紀の美術研究とも深く関連する貴重な書物に掲載された全ての版画が閲覧できる。

b. 個人・商業機関の画像データベース

ブリッジマン美術図書室「イメージ・サーチ」<http://www.bridgeman.co.uk/index.asp>

1970年初めより美術館等の複製作品を専門に扱ってきた企業。個人ユーザーはサムネイル表示が原則だが、会員登録をすると、さらに充実した検索が行える。

「アートサイクロペディア」<http://www.artcyclopedia.com/>

画家名、作品名、所蔵機関名、用語別で検索。12万5千点。

ハーデン「アートカイヴ」http://artchive.com/ftp_site.htm

作家名別に約2千点の画像が検索できる。

ベルジェ財団「世界美術遺産」<http://www.bergerfoundation.ch/>

画家別索引。

CGFA「仮想美術館」<http://sunsite.sut.ac.jp/cgfa/>

デンマークのガーデン・ジャクソン氏によって構築された画像データベース。画家名索引。

AMICO「美術博物館画像協会」<http://www.amico.org/home.html>

2002年だけでも10万点の画像データベース。無料使用はサムネイル表示のみだが、登録すればより大きな画像も閲覧できる。

「ウェブ・ギャラリー・オブ・アート」<http://gallery.euroweb.hu/welcome.html>

12～17世紀までの美術作品データベース。

「オルガ・ギャラリー」<http://www.abcgallery.com/>

画家および主題の検索機能付き。8千点。

「アート・オンライン」<http://www.artonline.it/artista.asp>

イタリアのサイト。「アート・ヒストリー」という項目から、画家別・主題別に索引できる。

DNP「イメージ・アーカイヴ」<http://www.dnparchives.com/>

大日本印刷による、RMN、ロシアのプーシキン美術館などのデジタル・アーカイヴと提携。

c. その他

「アイコンクラス」 <http://www.iconclass.nl/>

同一主題の図像を調査するときには必ず参照されるべき「アイコンクラス *Iconclass*」の項目分類の巻が、インターネット上で検索できるようになっている。書物で調査する前に、このサイトであらかじめどの巻を見ればよいか分かるので便利である。

. 文献・美術図書館情報

各国の国立図書館の所蔵目録を検索するのが、最も数多くの情報を収集できることは、他の学問分野と変わらない。ここでは、特に、美術専門の図書館や、美術に関連して作成された文献データベース等について紹介する。

a. 美術図書館・美術研究所等、公的機関の所蔵目録

<フランス>

フランス国立図書館「オパール・プリュス」

<http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/catalog.htm>

その豊富な所蔵のため、検索結果が、出版史的な資料価値を含んでいる。また、書誌情報の詳細表示には、版画が挿入されているか否かまで表示されるので、閲覧の時には非常に参考になる。最近では「ガリカGallica」（この項目の下記を参照）へのリンクも張られているので、オンライン上で資料が入手しやすくなった。

フランス文化省「フランス美術館管理部美術図書館共通所蔵目録」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/doclvr/pres.htm>

フランス国内にある美術館に併設されている図書館の共通所蔵目録。

フランス文化省「アルシドック」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/chastel/pres.htm>

フランス国内の建築物に関する文献データベース。

フランス国立図書館「ガリカ」 <http://gallica.bnf.fr/>

所蔵図書の一部をスキャニングし、オンラインで公開。まだまだ資料数は少ないが、17,18世紀の辞典類は充実している。

リヨン市立図書館「オンラインカタログ」<http://www.bm-lyon.fr/>

フランス国内でも、市立にも関わらず、パリ国立図書館に次いで評価の高い図書館。14,15世紀に刊行された貴重書も豊富に所蔵している。また、1999年にフォンテーヌ図書館よりイエズス会コレクション50万冊が寄託された。こちらも必見。

<イギリス>

大英図書館「オンラインカタログ」<http://blpc.bl.uk/>

仏、米の二大国立図書館と共に、押さえておくべきページ。

国立美術図書館<http://www.nal.vam.ac.uk/>

19世紀を中心に多数の貴重書を所蔵する美術図書館。

ワールブルグ研究所図書館

<http://www.sas.ac.uk/warburg/mnemosyne/entrance.htm>

美術のみならず、古典文学、宗教、神話など一次資料に優れる。

コートールド美術研究所図書館

http://www.courtauld.ac.uk/sub_index/book_library/index.html

近年の展覧会カタログなどに優れる。

オックスフォード大学図書館「オリスOLIS（オンラインカタログ）」

<http://library.ox.ac.uk/>

ボードリアン図書館を含み、100近くあるオックスフォード大学の図書館の蔵書検索。

英国美術図書館協会「アーリスARLIS」

<http://arlis.net/search.php?search>

イギリス国内にある美術図書館協会のメンバーリスト

<アメリカ>

国会図書館「オンライン・カタログ」<http://catalog.loc.gov/>

フランス国立図書館に匹敵する蔵書内容で、書誌情報が非常に参考になる。

ゲッティ研究所「図書館所蔵目録」<http://library.getty.edu/>

その優れた蔵書数、内容はもちろんのこと、キーワード検索によって、掲載論文や掲載項目のレベルで検索が可能で、非常に貴重な文献目録。

<イタリア>

「ヘルツィアーナ図書館」http://www.biblherz.it/cgi-bin/gucha_en.pl

ローマにある美術図書館の蔵書検索。

「フィレンツェ美術史研究所」

http://www.khi.firenze.it/cgi-bin/hkhi_de.pl

フィレンツェにある美術図書館の蔵書検索

<ドイツ>

「ミュンヘン中央美術史研究所」

http://www.zikg.lrz-muenchen.de/main/biblio/opac_info.htm

その蔵書内容の充実ぶりと独特の分類法で名高い美術史研究所の検索ページ。

<日本>

横浜美術館「美術図書室OPAC」http://202.248.167.221/jhkweb_JPN/

展覧会図録、個別研究書を中心に充実。

愛知芸術文化センター「アート・ライブラリー」

<http://www.aac.pref.aichi.jp/bunjyo/center/index.html>

展覧会図録、個別研究書を中心に充実。

<その他>

「国際図書館協会 美術図書館名簿」<http://artlibrary.vassar.edu/ifla-ida/>

世界中の美術図書館を調べることができる。

b. オンライン書店など商業機関のデータベース。

「アマゾン」

アメリカ <http://www.amazon.com/>

フランス <http://www.amazon.fr/>

イギリス <http://www.amazon.co.uk/>

サムネイル表示の段階から、刊行年が表示されたり、古書でも買えたりと非常に便利。

「ア・ラ・パージュ」<http://www.alapage.com/>

フランスのオンライン書店.アマゾンより検索に時間はかかるが、フランスで刊行された書物であれば、アマゾン・フランスより多数の検索結果が抽出されることが多い。

「エイブックスabebooks」<http://www.abebooks.com/>

世界中の書店と提携したオンライン古書店サイト。かなり貴重な古書でも、ここなら見つかることが多々ある。同一タイトルのコピーが複数ある場合、各書店の価格、状態などが一目瞭然で見比べることができる。

III. 美術関連情報を探す

画像、文献以外の美術情報を提供しているサイトは、下記のようなものがある。

a. 美術家について調べる

ゲッティ研究所「ユーランUnion List of Artist Names」

http://www.getty.edu/research/conducting_research/vocabularies/ulan/

芸術家名の表記については、通常、何通りもの記述の仕方があるが、それらを調査し列記した書物のウェブ版。論文中で用いる前に、これで確認できるので便利。

「アメリカ・プリント・カウンシル」www.printcouncil.org

版画作品を、画家や版画家名から探す。検索すると、その芸術家についての項目がある、主要な文献と典拠が示される。

b. 美術館について調べる

< 世界共通 >

「世界の美術博物館リンク集」<http://www.musee-online.org/>

「ユーロギャラリー」<http://www.eurogallery.org/>

所蔵コレクションをウェブ上で公開している世界の美術館が検索できる。

<フランス>

「ミュゼオフィル」<http://museofile.culture.fr/>

フランス国内1285の美術館検索

<イギリス>

「アート・ガイド」<http://www.artguide.org/uk/intro.html>

イギリス国内650の美術館検索。

<アメリカ>

「ミュージアムスタッフ」<http://www.museumstuff.com/museums/>

アメリカ国内1000の美術館検索。

<イタリア>

「ムゼイ オンライン」<http://www.museionline.it/>

イタリア国内の美術館検索

<ドイツ>

「ノイエ・クンストクバルティア」

http://www.neueskunstquartier.de/ateliers_galerien_museen/ateliers_galerien_museen.php

ドイツ国内の美術館検索

c. 美術用語について調べる

ゲッティ研究所「美術&建築用語類例集」

http://www.getty.edu/research/conducting_research/vocabularies/aat/

グローブ「ディクショナリー・オブ・アート」

<http://www.groveart.com/>

美術に関するあらゆる基本情報を調べるための重要な美術事典*Dictionary of Art*を、年間使用料を払って契約するとインターネットから参照できる。

フランス文化省「建築用語類例集」

<http://www.culture.gouv.fr/documentation/thesarch/pres.htm>

建築用語データベース

以上、美術史研究に役立つ電子情報について述べた。無論、ここで紹介したものがすべてではなく、類似のサイトも含めると、無数に存在しているのが実状である。こういった膨大な情報の渦に巻き込まれて、研究の方向性を見失わないためにも、 で列挙したように、これらのサイトを論理的に選別、分類しているリンク集に常に立ち戻ることが重要であると言えよう。

(日本大学大学院修了・芸術学博士)

事務局より

年報18号の「会員業績」に関するお詫び

2003年6月発行の年報18号の「会員業績」に、メールで事務局に業績表をお送りいただいた方々のデータが反映されておりませんでした。メールでご返答いただきました会員諸氏にお詫びいたします。脱落しておりましたデータは来年度発行の年報19号に掲載させていただきます。

会員業績

2004年発行の年報19号の「会員業績アンケート」にご協力ください。締切は2004年2月末日といたします。同封のアンケート用紙にご記入の上事務局にご返送くださるか、あるいは、voltaire18th@yahoo.co.jp宛にメールでお送りくださいますようお願いいたします（メールの場合も、書式はアンケート用紙に従ってください）。原則として2003年4月から2004年3月までの業績（3月分は予定で結構です）をお書きください。ただし、新入会員の方や記載漏れの場合はその限りではありません（なお、『年報』所載の記事は除きます）。

共通論題について

2005年以降の大会における「共通論題」につきまして会員からのご要望をお待ちしております。共通論題の準備により多くの時間を割くために、現在2005年の共通論題の案として「都市」があがっておりますが、その他のご提案がありましたら、事務局までご連絡ください。なるべく具体的に、テーマ・趣旨をお寄せくださいますようお願いいたします。

事務局の移動について

前回の学会ニュースでお伝えいたしましたように、代表幹事が安藤隆穂幹事から佐々木健一幹事に代わりました。それに伴い、事務局が9月より以下のとおり移転いたしました。

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

常駐の事務員はおりませんので、ご連絡は郵便あるいはメールにてお願いいたします（郵便物およびメールは1週間に1度確認いたします）。メールアドレスは voltaire18th@yahoo.co.jp です。

なお、事務局移動に伴い振替口座も変更いたしました。会費未納入の方には新しい振り込み用紙を同封しておりますので、こちらをお使いください（データは11月下旬のものに基づいておりますので、行き違いですでお振り込みの場合は、ご容赦ください）。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

毎回、入会申込用紙を同封しております。国際学会名簿のための資料として、欧文の記載もお願いいたします。これはすでに会員になっておられる方に再提出を求めているわけではなく、新会員の勧誘にご協力いただくためのものですので、コピーするなどしてよろしく願います。

幹事会：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事・年報担当)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉(常任幹事)、佐々木健一(代表幹事)、高橋博巳、寺田元一(国際幹事)、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)

会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第44号 2003年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp